マタイによる福音書 18 章 10-20 節 「心を一つに」

11-14 節は「迷い出た羊」のたとえですが、10 節では「小さき者へ配慮せよ」と語られ、直後の 15 節からは「教会の兄弟たちの忠告」が語られています。そこにあるのは教会の中での赦しの問題です。聖書を読む時には、文脈の中で読むことが大事です。マタイでは、「小さな者をつまずかせる者は災いだ」という文脈の中で、「迷い出た羊のたとえ」が語られています。小さい者とは、マタイでは配慮と助けを必要とする人を指します。人が教会につまずき、あるいは自分の問題で、教会から離れて行く現実を見て、「誰かが教会につまずいたとしたら、それは教会全体にとって非常時なのだ。父なる神はその一人でもが失われることを望んでおられない」と述べています。群れの一匹が迷いでた時、羊飼いは九十九匹を「山に残して」、一匹を探しに行きます。マタイでは山は「聖なる場所」です。山は神の守りの中にある、安全な場所、「九十九匹を山に残して」とは、彼らを「教会」という安全な場所に残して、迷い出た羊を探しに行くことを意味しています。

ルカ福音書(ルカ 15:4-7)は、「見失った羊」となっており、「無くした銀貨のたとえ」「放蕩息子のたとえ」と並んで記されています。マタイ版とルカ版の「一匹の羊のたとえ」を比較してわかることは、人は置かれた立場で聖書の言葉を読むということです。どちらの読み方が正しいとは言えない。では、イエスさまの真意は何なのか。

マタイ版では、いなくなった羊は教会の群れに戻されます。その時、教会の中に緊張が走ることでしょう。どうすれば良いかを語るのが、15 節-20 節の言葉です。「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。…それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人が徴税人と同様に見なしなさい」(18:15-17)。この個所に教会(エクレシア)という言葉が二度出てきますが、これは福音書ではマタイのみに用いられる言葉です。あくまで、マタイ福音書の視点は、「教会」にあるのです。

18 節で「はっきり言うておく」とイエス様が弟子たちに迫ります。これはペトロの信仰告白に対して、イエスさまが「わたしの教会を建てよ」と宣言されたときのお言葉と同じです(16:15-19)。この約束はペトロ個人にだけ与えられたのではなく、心を一つにしてイエスさまの教えを受ける弟子たち一同に与えられたものと分かります。迫害が強まり殉教者が絶えない時代に福音書が記されたことを覚えます。天の国が多くの民族や国民に伝えられると同時に、教会の中に分裂や仲間割れも増えました。この世の困難に窮する中で、教会から居場所を失った人は一体どこで神と出会えるのでしょうか。「つなぐこと」は拘束すること、禁止することの意味です。「解くこと」はその逆で自由の身とし、許可することです。その権威が教会に委ねられています。教会が誰かを締め出したりつまずかせたりすることがあれば、その人は生きていうちに天の国への行き場を失ってしまいます。教会に居場所を得られるならば、この世でどんな困難に遭ったとしても天の国に帰る希望を見失うことはないでしょう。教会の中の誰か一人でもその人と繋がっていれば、望みがあります。二人が心を一つにして求めるなら天の父がかなえてくださる。更にもう一人の協力が得られるならば光が見えてきます。「あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」(19)。二人または三人が主の名によって集まるならその中に御子がおられます。教会に一致と交わりがあるならば、99 匹がいる囲いの外で迷い出た 1 匹が助け出されるのです。